(三) 乳母の死

夢に夢をみたような、五年の空費を埋めるべく旅から旅へと旅の毎日が続いた。道辺の神仏に祈念し、逢う旅の人々の風の噂をききめぐりあるいたが、その年も遂にめぐりあえず、むなしく過ぎ去つた。

年が明けて間もなく、五年の女中奉公がたたつたのか、ある旅籠で風邪を患つた乳母はどつと床についたまま、四日たつても五日たつても快方にむかわなかつた。姫はけなげに医者よ薬よと、夜も寝ずに看病を続けたが、その効めもなく、乳母の病は日に日に重くなるばかりであつた。死を悟つたか、ある日乳母は重き枕をもたげ、姫に申上げることがあると、糸よりかぼそい声を励まし姫をよぶ、姫が近寄ると乳母は姫の手をとり「もはや妾は死をまつばかりとなつた。若殿を尋ね得ずして他界することは、死んでも死にきれぬことではあるが今はいたし方ない。妾はたとえ死んでも、魂魄となつて姫に付添い、悪事災難などなきようにお守りし、一日も早く若殿におあいできるよう、陰になり陽になりして守りつづけますから、乳母なきあとも御力を落さずお尋ね下さい」といつたかと思うと、眠るが如く息を引きとつた。姫はわつと声をあげ乳母の死骸をかき抱きつつ、前後不覚になげき悲しんだ。旅籠の主人や隣り近所の人達もその死を知り、米や金子をととのえてかけつけ何かと世話をしてくれた。そのため旅では思いがけなかつた程の手厚い野辺送りができた。姫はこの地において、長く苦しみをともにしてきた乳母のため、七日、七日の法要をいとなみ、日夜その霊を慰めた。